

日本語教育のための学習教材

しっぺい^{たろう}太郎・サワガニ^{おんがえ}の恩返し

すみ^{すみ}炭とわらとそら^{まめ}豆・雀^{すずめ}の恩返し^{おんがえ}

NPO 法人 国際教育文化交流会

平成25年度文化庁委託「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

はじめに

今回、日本語教材テキスト作成のために取り上げた昔話のいくつかは、口伝えされ、耳で聞かれ、記録された静岡県内の元話を今の子どもたちに聞いていただけるように、聞きやすく、読みやすく再話したものを使いました。

日本語の勉強をしている日系ブラジル人の高校生が、日系ブラジル人の小、中学生あるいは高校生に昔話を伝えるとしたならば、どんな言葉を注として入れたらわかりやすいか数人で相談して、ポルトガル語の注を付け、さらにアニメ風な絵で親しみやすく表現しました。

ポルトガル語の注と絵をつける過程において、担当した高校生にとっても日本の風土、日本の昔の人の考え方、日常に使用していた道具等についての理解が深まり、またポルトガル語、ブラジル文化との比較もでき有意義な作業であったことと思います。

ポルトガル語の注は、主にあいの国際高等学院の別府カレン小恵美、絵はイノエ メイミが担当しました。再話は名古屋昔話再話研究会（小澤俊夫主宰）、静岡グループ（大石みち子・杉本みゆ・萩田敏子・平松洋子・泰山則子）が再話したものを使用しました。

文中の下線二重線は、各再話の終わりに日本語とポルトガル語による注がある印であり、一重線は、語の次に括弧内にポルトガル語で表した印です。

このささやかなテキストが日本語を勉強している方々に読まれ、先人が口伝えして残した昔話を知っていただける機会になれば幸いです。

名古屋昔話再話研究会

静岡グループ 萩田 敏子



しっぺい太郎^{た ろ う}

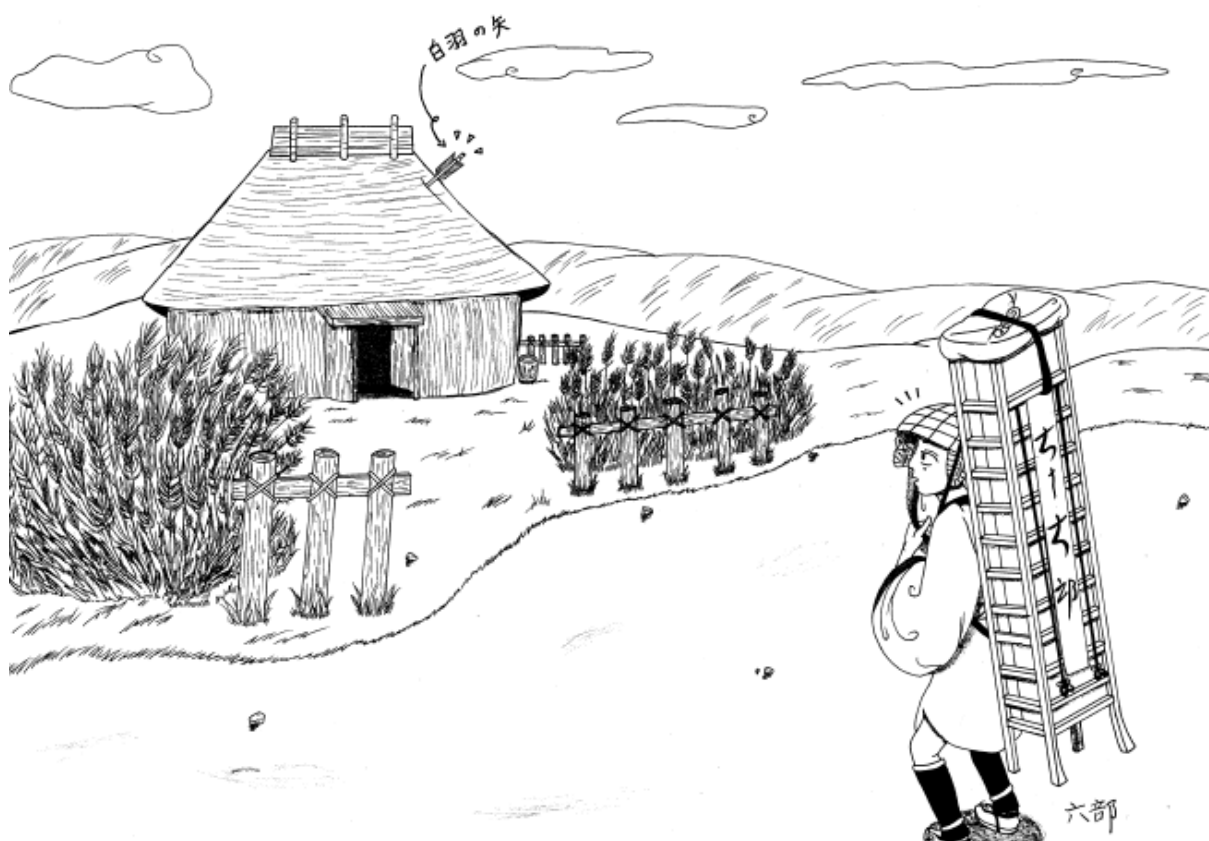
げんわ
原話(história original)

や な ひ め じんじゃえんぎ しずおかけんい わ た し みつけてんじんじゃ
弥奈比売神社縁起 (静岡県磐田市見付天神社)

むかし、ひとりの^{ろくぶ}六部が旅をしていました。あちらこちら歩いているうちに、^{みつけ しゆく}見付の宿に通
りかかりました。見付の宿はどこの^{うち}家でも^{もち}餅つきをしていました。六部が祭りでもあるのかと
思って歩いていくと、^{いっけん}一軒(uma casa)だけ餅つきをしないで、ひっそり(silenciosa)している家が
ありました。



六部がわけを聞くと、家の主(^{あるじ}dono da casa)が、
「毎年、八月の初めになると、どこかの家に白羽の矢が立つのです。白羽の矢が立った家では、
八月十日の夜に、娘(^{むすめ}filha)を天神様(^{てんじん})に人身御供(^{ひとみごくう})としてあげなければなりません。もしあげなければ、大風が吹いて田んぼや畑がすっかり(^あtotalmente)荒らされて(^あdevastado)しまいます。今年
は私の家に白羽の矢が立ちました。それで泣いているのです。」と答えました。

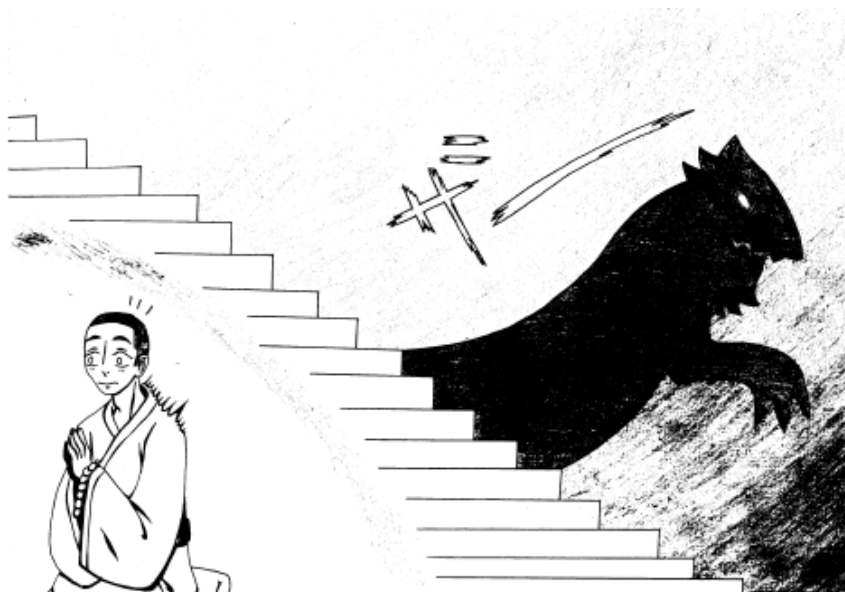


六部は、
「神様(Deus)がそんなことをするわけがない。わし(eu)が確かめてやろう」と言って、天神様の
森に行きました。そして、階段(^{かいだん})の下に隠れて、経(^{きょう})を唱えていました(^{estava rezando a sutra}
budista)。夜中になると、どこからか、何者かが近づいてくる音がしました。六部がなおも一心
(^{se esforçando o mais que puder})に経を唱えていると、「信州(^{しんしゅう}nome de lugar em Nagano-ken)のし
っぺい太郎に知らせるな」という声がしました。

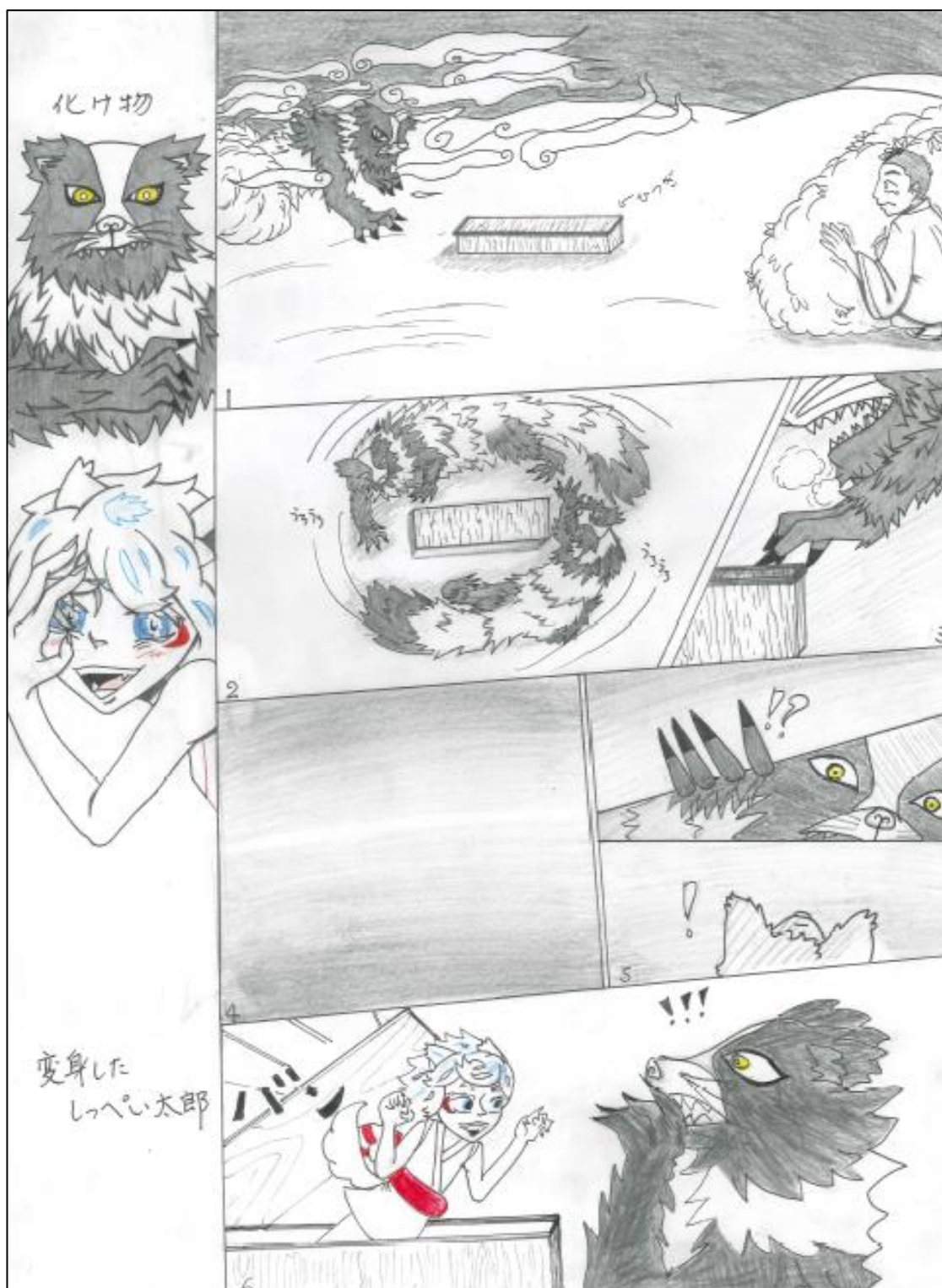
これを聞いて六部は村にもどり、しっぺい太郎をさがしに信濃の国(^{しなの}atual Nagano-ken)へ急ぎ

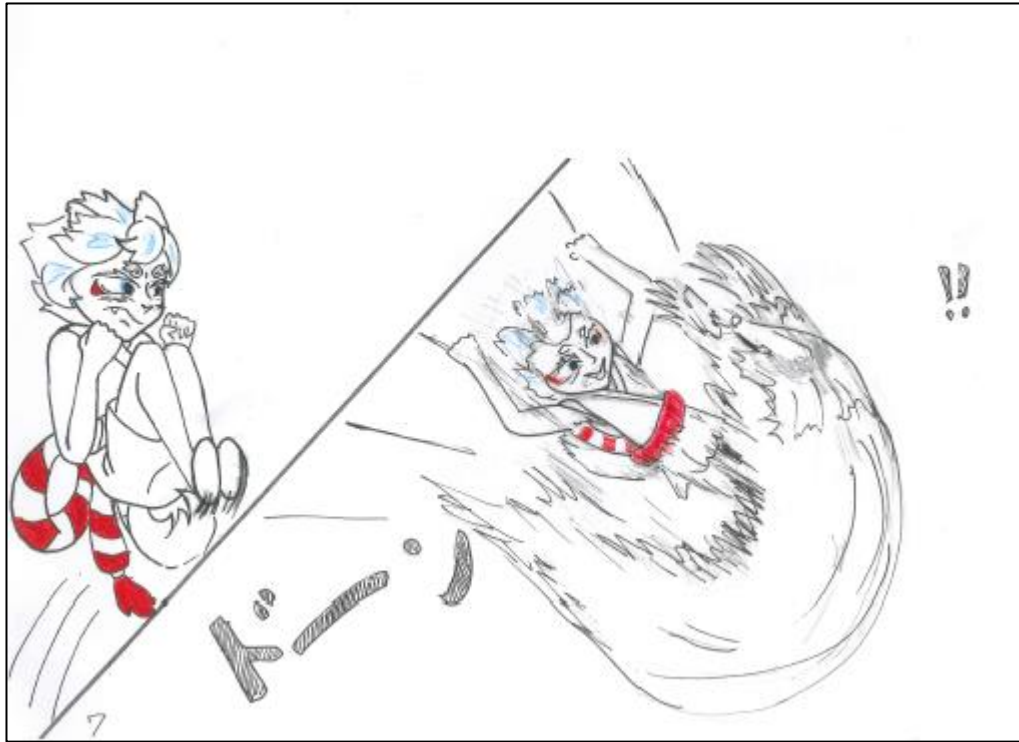
ました。信濃の国につくと、六部は、来る日も来る日も(todo santo dia)しっぺい太郎という人をさがして訪ね歩き(andou perguntando)、その年も暮れました(esse ano também passou)。しかし、しっぺい太郎という人はどこにも見つかりません。疲れ果てた(completamente exausto)六部が道端(^{みちばた}beira da estrada)で休んでいると、村人(camponês)が通りかかりました。六部は村人に、「この辺にしっぺい太郎という人はいませんか」と訪ねました。すると、村人は、「しっぺい太郎という人は知りませんが、しっぺい太郎という犬なら、光前寺(^{こうぜんじ}にいますよ」と教えてくれました。六部は急いで光前寺に行くと、和尚(^{おしょう}さんに見付の話をして、「化け物(monstro)を退治(^{たいじ}derrotar)するためしっぺい太郎を貸してください」と頼みました。すると、和尚さんは、「見付の人々(ひとびと)のためになるならお貸ししましょう」と言いました。六部はしっぺい太郎を借りると、見付(めづ)を目指して急ぎました。

さて、見付の宿では、今年も八月になると、また一軒の家に白羽の矢が立ちました。八月十日の夜、娘の家では泣く泣く(むすめ)娘をひつぎ(caixão)に入れて、たった今、かつぎ出そう(começar a carregar)としていました。ちょうどそのとき、六部がしっぺい太郎を連れて戻ってきました。六部は、娘のかわりに(no lugar da menina)、しっぺい太郎をひつぎの中に入れました。人々は、ひつぎを社(templo)の前まで運ぶと、後ろを見ないで逃げ帰り、天神様(ようす)の様子を窺(うかが)って(prestar atenção)いました。



やがて(daqui a pouco)、真夜中^{まよなか}ごろになると、化け物がやってきました。そして、ひつぎの周^{まわ}りを回りながら、「信州のしっぺい太郎に知らせるな」と言ってひつぎのふたに手をかけまし
た(pôs a mão)。





そのとたん(Assim)、ひつぎからしっぺい太郎が飛び出して、化け物に飛びかかりました(atacou)。しっぺい太郎と化け物の^{たたか}戦うものすごい音が聞こえてきました。

次の朝、人々が天神様へ行ってみると、年とった(velho)大きなタヌキ(guaxinim)が死んでいました。それから人身御供はなくなり、見付の人々は、安心して暮らせるようになりました。

しっぺい太郎は^{けが}怪我をしていました(estava machucado)が、生きていました。人々はしっぺい太郎の^{はたら}働き(esforço)に^{かんしゃ}感謝して、ていねい(com educação)にお礼を言って光前寺に送り届けました。そして、このあと^{だいはんにゃきょう}大般若経六百卷(ensinamentos de Buda -capítulo600-)を光前寺に^{おさ}納めました(ficou guardado)。

* しっぺい

^{しっふう}疾風、速く^ふ吹く風がなまったといわれる。

Da palavra “shippuu”, passou para palavra “shippei”, que significa vendaval.

* ^{ひとみごくう}人身御供

神をはじめ超自然的存在への^{ささ}捧げものとして生きた人間の体や^{れいこん}靈魂を^{ささ}捧げること。目的

は、^{えきびょう}疫 病 の流行、天災などのわざわいを神などの怒りによると考えて、それをなだめなくさめるため。自分の集団の人間をいけにえに捧げる時には、「白羽の矢」が立つなどという形で神の意志によって選ばれることが多い。

Ato de dedicar a alma e o corpo de um ser humano vivo como um tributo ao sobrenatural existente, incluindo Deus. Propósito, a fim de ser considerado como devido à ira de Deus, como as epidemias, pragas, tais como desastres naturais, para confortá-lo. Quando você sacrificar um ser humano da população de sua vila, ser escolhido pela vontade de Deus na forma "o escolhido" que estão em muitos casos.

*^{ろくぶ}六部

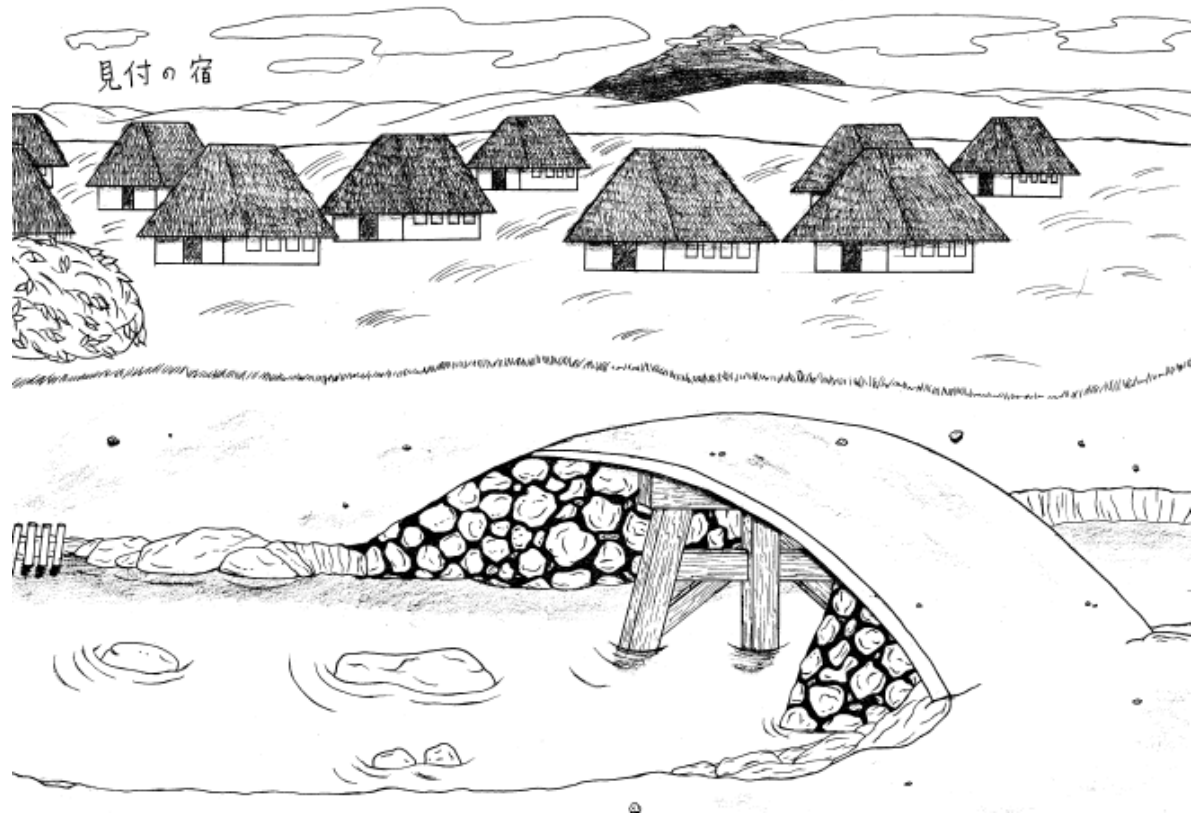
六十六部の^{りやく}略で本来は、全国六十六か所の^{れいじょう}霊場に一部ずつ経をおさめるために書き写れた六十六部の『^{ほけきょう}法華経』のことをいったが、のちにその^{きょう}経を納めて諸国^{しょこく}霊場^{れいじょう}を巡^{じゅん}礼^{れい}する僧^{そう}のことをさすようになった。

Originalmente, fala sobre “Rokujurokubu” que foi uma cópia escrita, a fim de ajustar o sutra em porções para o solo sagrado de sessenta e seis locais em todo o país [Sutra de Lótus] que significa “Rokujurokubu”, mas, hoje em dia, refere-se ao monge que os países de peregrinação consagrou ao chão com o pagamento.

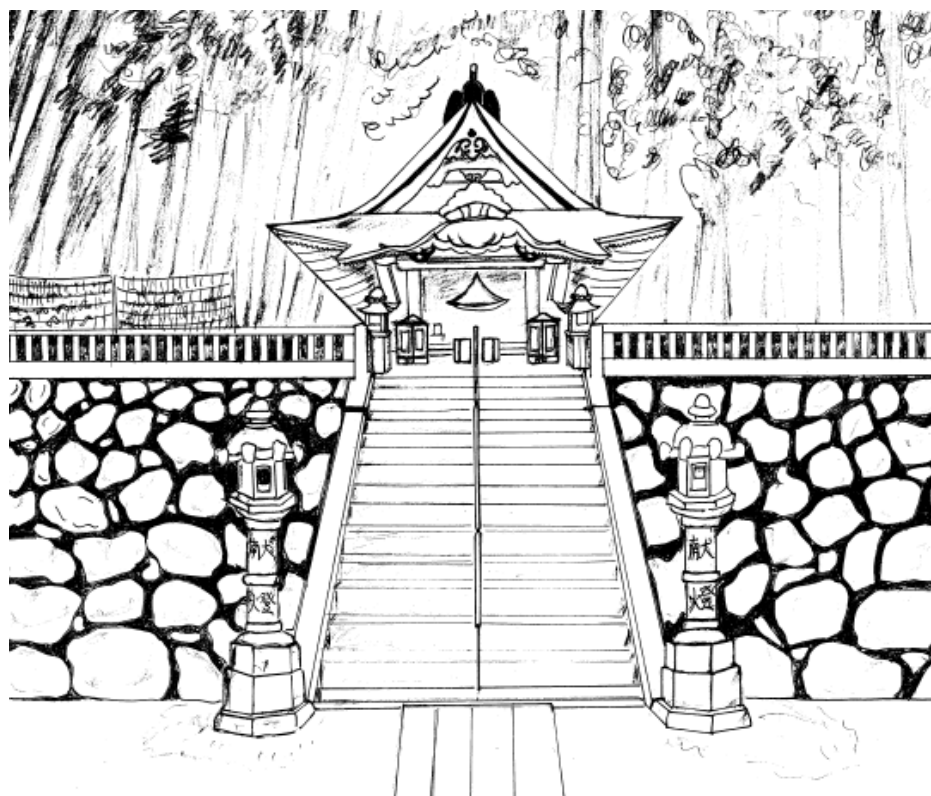
*^{みつけ}見付^{しゆく}の宿

^{しずおかけんいわたしみつけ}現静岡県磐田市見付、^{こだい}東海道^{とおとうみこくふ}のほぼ中間にあたる。古代以来、遠江国府が置かれ、中世からの^{しゆくばまち}宿場町。

Entre o meio caminho atual de Shizuoka, Iwata, chegando ao Tokaido. Desde os tempos antigos, Tootoumi Kokufu foi colocado, a cidade desde a Idade Média.



こうぜんじ
*光前寺



ながのけんこまがねしあかほ てんだいしゅう さんごう ほうしやくざん かいぶつ
長野県駒ヶ根市赤穂にある天台宗の寺。山号は宝積山。見付の怪物を退治して、人身御供
を救った早太郎伝説がある。

Templo da seita Tendai que fica em Nagano, Komagane Akaho. O seu nome é monte Hoshaku. Existe uma lenda chamada “Hayatarô-densetsu”, que o personagem principal Hayatarô acabou com o sacrifício humano.

おしょう
＊和尚

一般の僧侶、または寺の住職のこと。

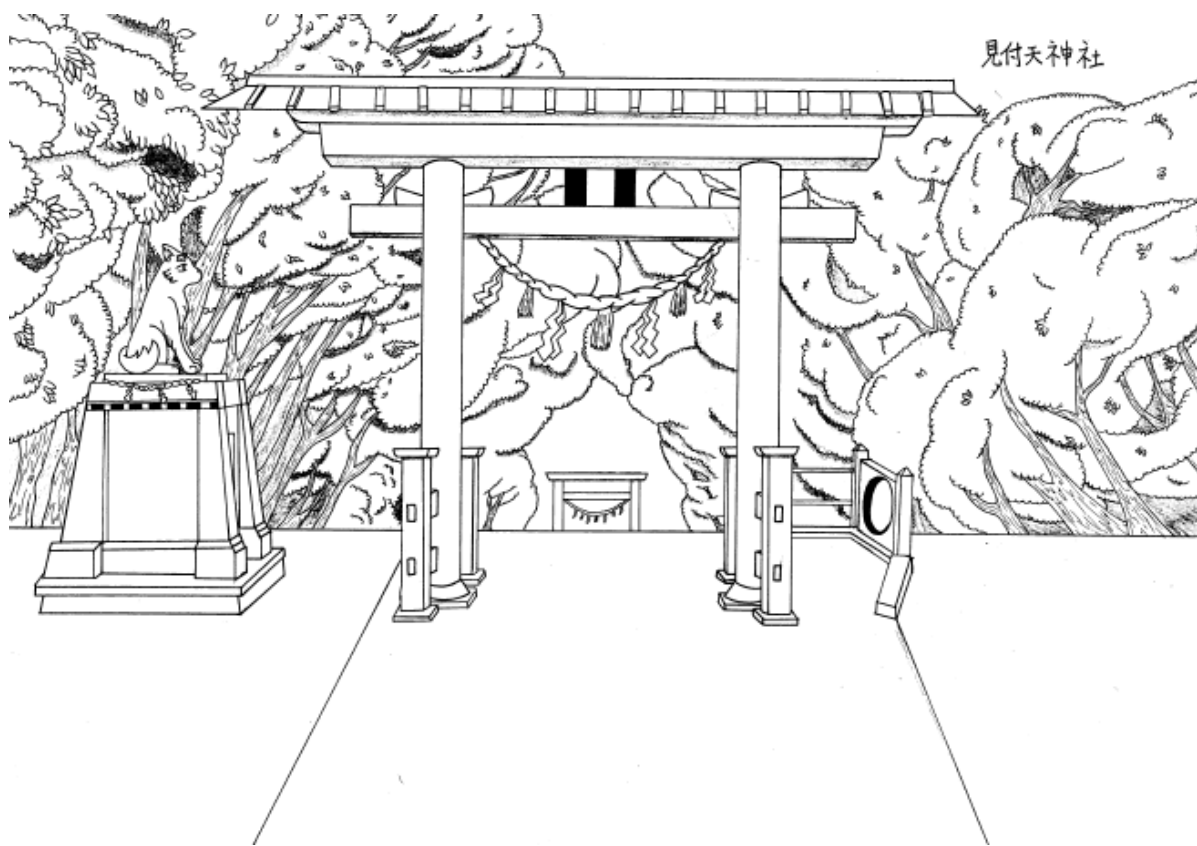
Sacerdote ou dono do templo.

てんじん
＊天神様

学問の神様といわれるすがわらのみちざね まつ かくち
菅原道真を祭った神社。全国各地にある。

Santuário dedicado a Michizane Sugawara, que dizem que é o deus da aprendizagem. Possui no Japão inteiro.

やなひめじんじゃ しずおかけんいわたし みつけてんじんしゃ
＊弥奈比売神社（静岡県磐田市見付天神社）



サワガニの恩返し^{おんがえ}



きゅうしたぐんやいづまち
旧志多郡焼津町 原焼津市

むかし、ある山里^{やまざと}に、おじいさんと二人の娘^{むすめ}(filhas)が住んでいました。娘たちは、毎日うらの谷沢^{たにざわ}でお釜^{かま}やおひつを洗っていました。その谷沢には、サワガニがたくさんいました。娘たちは、お釜やおひつについている飯粒^{めしつぶ}(grãos de arroz)をいつもサワガニにやっていました。

おじいさんは、池^{いけ}のそばに、田んぼを五かまちも六かまち(modos de conta a plantação de arroz)ももっていました。ある年のこと田んぼは、ちょうど稲^{いね}(planta de arroz)が育つころに、水がひあがって(secar)しまいました。

ある日、田まわりに行ったおじいさんが困^{こま}って立っていると、どこからかゴロゴロという音が聞こえてきました。音のする方へ行ってみると、池のそばで大蛇^{だいじゃ}(cobra gigante)が寝ていました。おじいさんが大変^{たいへん}だと思っていると、大蛇はかまくび(quando o pescoço estica como uma foice)をあげて針^{はり}のような舌^{した}(língua)をペロリと出しました。

おじいさんが、



「おまえさんは、この池のぬし(algum ser que mora há muito tempo na lagoa)さんか」^{たず}と訪ねました。

「そうだ」と大蛇は答えました。そこで、おじいさんは、
「それじゃあ、おまえさんの力で、この田んぼに水をひく(pôr água)ことができるだろう。どうか、水をひいてくれないか」

「それはたやすい(fácil)ことだ。そのかわり、おれの願いも聞いてくれ」

「ああ、田んぼに水をひいてくれさえ(pelo menos)すれば、なんでも聞こう」と言いました。大蛇は、

「おまえには^{ふたり}二人の娘があるな。^{ひとり}一人をおれの^{よめ}嫁(como esposa)にくれ」と言いました。おじいさんは困り

ましたが、とうとう(finalmente)約束して、田んぼに水をなみなみと(quase transbordando)ひいてもらいました。

おじいさんは家に帰ると、ものも言わずに、しょげ(desanimado)かえっていました。娘たちは、

「なにか^{しんぱいごと}心配事でもあるのですか」と聞きました。

「わし(eu)は、言うに言われない(não tem como dizer)悪いことをしてきました」

「言うに言われないとは、どんなことですか。どうか話してください」おじいさんは、

「じつは、池のぬしの大蛇がいたので、田んぼに水を引いてくれるようにたのんだら水をひいてくれた。けれども大蛇が、その代わりにおまえたちのうちの一人を嫁にくれというので、わしは約束してきました」と、話しました。娘たちはおどろきましたが、親おもいの娘たちだったので、

「わたしが行く」

「いいえ、わたしが行く」と言い合って、なかなか決めることができません。そこで、ふたりはくじをひくことにしました。そして、妹が嫁に行くことになりました。

いよいよ、^{やくそく}約束の日が来ました。妹は大きなたる(barril)の中に入って、むかえが来るのを待っていました。大蛇は、^{りっぱ}立派な男の姿になってあらわれ、
「約束の娘をもらいに来たぞ」と言いました。



おじいさんが、

「娘は、たるの中にいる」と言うと、男はたちまち(imediatamente)大蛇となり、ぐるぐると、たるを巻いてしまいました。と、その時、うらの方から、ざわざわ(ruindo)と、ものすごい音が聞

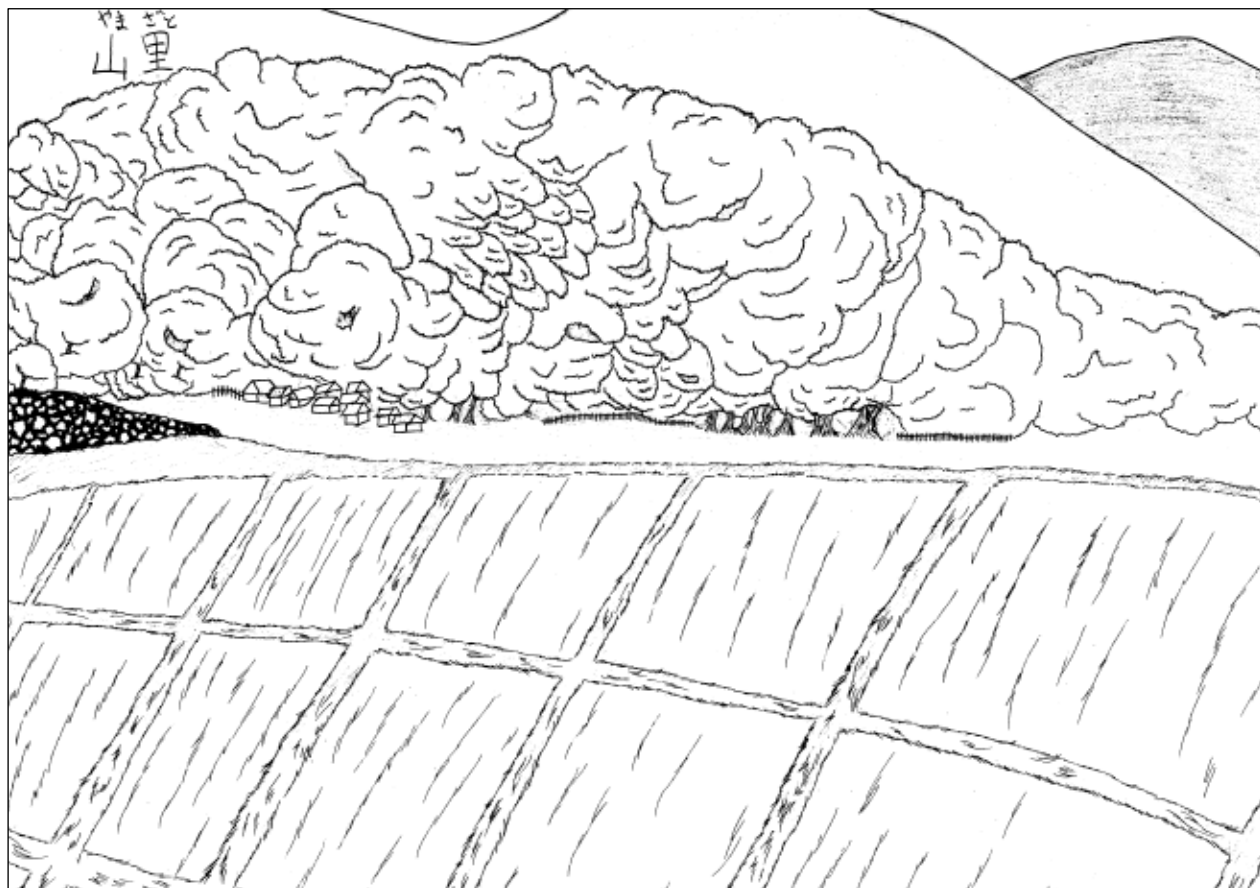
こえてきました。おじいさんが何事かとおそろおそろ(medrosamente)見ると、それは何万ともしれない(pode ser)サワガニでした。サワガニは、家に入るやいなや(assim que entrou)、大蛇の目といわず(além do)、首といわず、いっばいにむらがって(agrupa)、大蛇をハサミでちみくり(bilisco)ころ殺してしまいました。

こうして妹は、いつも谷沢で飯粒をやっていたサワガニにのおかげで大蛇の嫁にならずに済みました。

*山里^{やまざと}

山のなかの村里。

Aldeia dentro das montanhas.



* 里

Aldeia.

* 谷 (vale)

山と山とに挟まれた間のところ。

Espaço entre as montanhas.

* 沢 (pântano)

山間の、やや広くて浅い谷川。

Rio amplo e raso, onde fica entre as montanhas.

* お釜

ご飯を炊いたり湯を沸かしたりする道具。

Objeto para cozinhar arroz e ferver água.



* おひつ

炊き上がった飯を移し入れておく器。

Objeto para colocar o arroz já cozinhado.



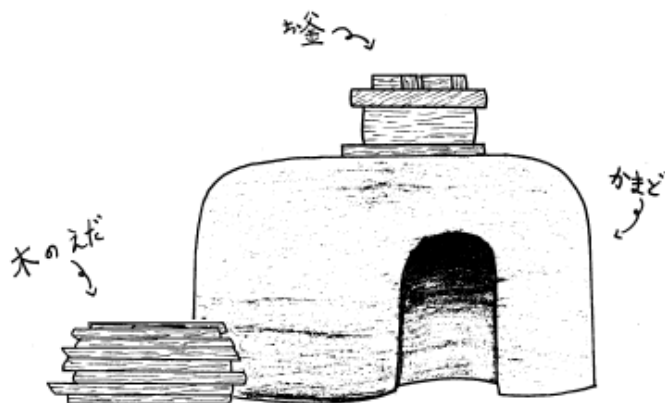
* かまど

鍋、かまどを掛け、その下で火を焚き煮る。

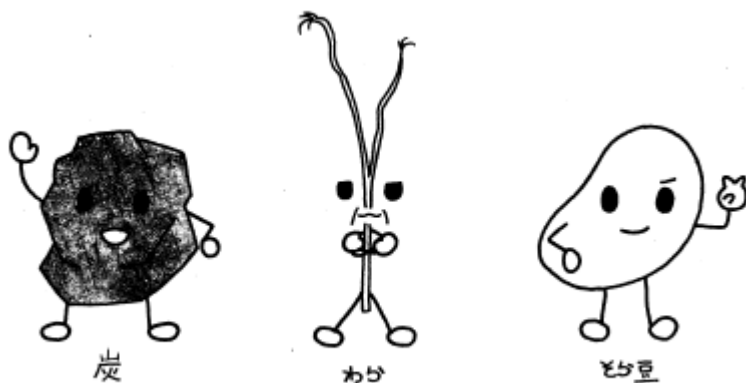
Onde põe o “okama” ou panela para cozinhar colocando os galhos dentro do “kamado” e botar fogo.

* 親おもい

Quando os filhos se importam pelo bem dos pais.



炭とわらとそら豆



げんだい 原題・そら豆の黒いすじ しずおかけんはままつしよしかわむら 静岡県浜松市芳川村

むかし、あるところに一人のおばあさんがいました。

ある日、おばあさんはそら豆(fava)を煮よう(ferver)と、おなべにそら豆を入れました。そのはずみに(com esse impulso)、一粒のそら豆が土間のすみ(no canto do...)へコロコロと転がり落ちました。おばあさんは、

「まあ、一粒くらいならいいだろう」と、そのままにしてたきつけのわら(palha que faz o fogo queimar facilmente)を持ってきました。

その時、風が吹いてきて、一本のわら(palha)が土間のすみのそら豆のところへ飛ばされました。おばあさんは、

「まあ、一本くらいならいいだろう」と、そのままにしておき、かまど(fornalha)に火をつけそら豆を煮ていました。すると、おばあさんが知らないあいだに、まっかな炭(carvão)がコロコロと落ちて、土間のすみのそら豆のところに転がっていきました。

そこで、炭とわらとそら豆は、「いっしょに、伊勢参りに行こう」と出かけました。炭とわらとそら豆が歩いて行くと小さな川がありました。川の前で、炭とわらとそら豆は困っていま

した。わらは、

「わし(Eu)が一番長いから、橋^{はし}になろう。おまえ^{わた}さんたち、先に渡^{わた}ってから、わしを引っぱっておくれ」と言って橋になりました。

炭とそら豆は、自分が先に渡ろうとして、けんかになりました。そら豆が負けて、炭が先に渡ることになりました。ところが、炭は半分くらい渡ると、怖^{こわ}くなり、前へ進めなくなりました。わらは、熱^{あつ}がって(ficou quente)、

「早く、早く」と炭をせきたてました(apressou)。せきたてればせきたてるほど(cada vez mais que apressa)炭は進めません。そのうちに、わらは焼^やけ切れて、わらと炭は「チュー」と音^{おと}をたてて(fez um barulho)水の中へ落^おちてしまいました。川の手前^{てまえ}(em frente)で見ていたそら豆は、大きな大きな声を出して、

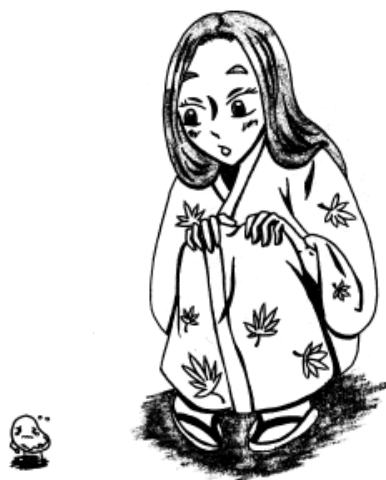
「さっきの罰^{ばつ}(castigo)だぞ」といって大笑^{おおわら}いをしたので、おなかがパチン(*onomatopeia de quando estoura algo)と割^われてしまいました。

そら豆が泣いていると、通りかかった娘^{むすめ}(menina)さんが、

「どうして泣いているの」と聞きました。そら豆は、

「水に落ちた炭を笑ったら、おなかが割れてしまいました」と答えました。娘さんは、

「それはかわいそうに」と黒い糸でそら豆のおなかを縫^ぬって(costurar)くれました。





それで、そら豆のおなかには黒い^{すじ}筋がついているのです。

*^{ど ま}土間

土などで作られた^{ゆか}床のこと。

Chão feito de terra.

*^{い せ まい}伊勢参り

^{しょみん}庶民が^{じんぐう}伊勢^{さんばい}神宮に参拝すること。

Quando as pessoas comuns vão ao santuário de Ise para rezar.

すずめ おんがえ 雀の恩返し

はまなぐんよしかわむら うつつはまつし
浜名郡芳川村・現浜松市



むかし、あるところに一人の^{ひとり なさ ぶか}情け深い(compassivo)おじいさんかいました。める日、わしいさんが、^{はたけ}畑へ行こうとすると、^{やね}屋根から^{すずめ}雀(pardal)が^{いちわ}一羽^おぱったり(abruptamente)と落ちてきました。見るとまだ^ま生まれて^あ間もない(acabado de nascer)雀でした。おじいさんが、かわいそうに思^{ひろ}い拾いあげてみると、雀は足が折れていました。

おじいさんはすぐにすずめの足に^{くすり}薬をつけ、また屋根にあげてやりました。何日か^た経って、おじいさんが^{にわ しごと}庭で仕事をしていると、すぐ目の前へ雀が^{ふん}糞(fezes)のようなものを落としていきました。



おじいさんは、

「やれやれ、雀がこんなものを落としていった」と言って拾ってみました。すると、それは何かの^{たね}種(semente)のようだったので、おじいさんは庭に^ま蒔いておきました(semear)。

しばらくすると(depois de um período)、ひょうたんの木(árvore de cabaça)^はが生えてきて、たく

さんのひょうたんが になりました。おじいさんは、あとで種を取ろうと大きなひょうたんを一つ
つる(videira)に残しておきました。そのひょうたんが 熟した(amadureceu)ので、
「そろそろ種を取ろうか」と割ってみると、中からたくさんのお金が出てきました。



おじいさんは、喜びました。次の日、隣のおじいさんにその話をしました。

隣のおじいさんは、大変うらやましく思いました(ficou com muita inveja)。そこで、家の屋根
に来た雀を大きな竿で追い回し(perseguiu com vara)足を折ってしまいました。そして、雀の足に
薬をつけて、屋根へ上げておきました。それから毎日庭で仕事をして、雀が種をもってくるの
を待っていました。しばらくすると、雀が来て一粒(um grão)の種を落としていきました。隣の
おじいさんが喜んでさっそくその種を蒔いておくと、やはりひょうたんの木が生えてきました。
やがて(em breve)、ひょうたんがたくさんなると、おじいさんは全部つるに残しておきました。
そのうちに、ひょうたんが熟したので、

「どれどれ(Vamos ver)」と、言って割ってみると、中から蛇^{へび}だの、蛙^{かえる}だの、蝮^{まむし}(víbora)だのが
ぞろぞろ出てきたそうです。



*～だの～だの

Utilizam no lugar da vírgula.

元話出典一覧

しっぺい太郎

矢奈比売神社縁起 見附天神社（現静岡県磐田市）

サワガニの恩返し

『新版 静岡伝説昔話集 （下巻）』羽衣出版 平成六年刊行

＊昭和九年三月に、静岡県立静岡県女子師範学校の郷土研究会より発行された『静岡県伝説昔話集』の現代語表記による新版。

六二八 志太郡焼津町・現焼津市 （神尾すず、岸本勝代）

炭とわらとそら豆

『新版 静岡伝説昔話集 （下巻）』羽衣出版 平成六年刊行

六九八 原題 そら豆の黒いすじ（六十七歳老女の話）

浜名郡芳川村・現浜松市 （金原せつ）

雀の恩返し

『新版 静岡伝説昔話集 （下巻）』羽衣出版 平成六年刊行

六四五 浜名郡芳川村・現浜松市 （小澤ちえ）

さ る が に が っ せ ん
猿蟹合戦

さいはなし 再話 2006. 06. 12 修正 しゅうせい

しゅってん に出典 ほんむかしばなしつうかん 日本昔話通観 ぎふけんえなぐんあけちちょうすぎひら 岐阜県恵那郡明智町杉平・男 おとこ

むかし、あるところに猿と蟹がいました。

ある日、猿は蟹を誘って出かけました。二人そろって歩いていくと、猿は柿の種(mente de caqui)を拾い、蟹は握り飯(bolinho de arroz)を一つ拾いました。猿は、蟹の握り飯が欲しくなり、「やあ(Oi)、蟹どん(semelhante de さん)、おれの柿の種と、おまえの握り飯を取り換えようじゃないか(vamos trocar)」と言いました。蟹は、

「いやだよ。柿の種なんか食べられないけど、握り飯ならすぐ食べられるもの、いやだよ」と言いました。猿は、それでも、

「取り換えよう、取り換えよう」と言って、しまい(enfim)には力づく(forçado)で取ろうとしました。蟹が、しかたなく(sem condições)握り飯と柿の種を取り換えると、猿は一人で握り飯を食べてしまいました。

蟹は、お腹をすかせて(deixando a barriga vazia)、柿の種を家へ持って帰り、庭に埋めました(enterrou no jardim)。そして、毎朝、水をやっては(dando água)、

「早う生えにやあ(semelhante de 早く生えなきや)、はさみ切る。早う生えにやあ、はさみ切る」と言いながら、はさみをチョキンチョキン(*onomatopoeia de quando corta alguma coisa com tesoura)と鳴らしました(soltou o barulho)。すると、柿の種は小さな芽(broto)を出し、すくすく(aos poucos)と伸びてきました。

蟹は、また、毎朝、水をやっては、

「早う大きくならにやあ、はさみ切る。早う大きくならにやあ、はさみ切る」と言いながら、

はさみをチョキンチョキンと鳴らしました。すると、柿もたまらん(não aguento)と思って、大きな木になって、青い柿の実^みをたくさんつけました。蟹は、また、毎朝水をやっては、「早う色づかにゃあ(se não ficar com cor)、はさみ切る。早う色づかにゃあ、はさみ切る」と言いながら、はさみをチョキンチョキンと鳴らしました。柿はすぐ真っ赤^{まか}(bem vermelho)になって食べごろ(época boa para comer)になりました。蟹は真っ赤な柿を見て、取って食べたいなと思いましたが、木に登^{のぼ}ることができません。

ある日、猿がはいはいはいはい(*onomatopeia de quando anda pulando)と言いながら飛^とんできました。猿は、

「やあ、蟹どん、柿がえらく赤くなったなあ(ficou bem vermelho, né)。おまえ一つ取ってくれないか」と言いました。蟹が、

「いや、おれもな、あの柿を食べたいけど取れないんだよ」と答えました。猿は、「そうか。それじゃあ、おれが取ってやろう」と柿の木へするする(*onomatopeia de facilmente)と登って行きました。猿は、柿の木の枝^{えだ}(galho)に腰^{こし}をかけて(sentou)、赤くて甘^{あま}そうな柿を自分だけむしゃむしゃ(*onomatopeia de quando come algo)と食べました。下から蟹が、たまりかねて(não aguentou)、

「やい(Ei)、猿どん猿どん、おれの柿はどうした。おまえばかり食べていないで、おれにも早く取ってくれ」と言いました。すると猿は、

「そうか、おまえも欲しいか」というなり(nesse momento)、一番青くて渋^{しぶ}そう(asco)な柿を取ると、

「そらっ(Tó)」と、蟹の背中^{せなか}めがけて(mirando às costas)、投げ^なつけました。

青^{あおがき}柿は、蟹の背中にどすん(*onomatopeia de quando acerta ou bate algo)と命中^{めいちゅう}(acertar)しました。しばらくして(depois de um período)、蟹の子(filho do caranguejo)が帰ってくると、母さん蟹(mãe caranguejo)が、息^{いき}もたえだえ(difícil de respirar)になっているので、

「母さん、母さんどうしたの」と聞きました。母さん蟹は、

「猿が自分だけ柿を食べて、おれには青い柿をぶつけて(bateu)行ってしまった」と言いました。

蟹の子は、

「悪い猿だ。かたきをとってやろう(vou vingar)」と言いました。そこへ、栗と蜂と臼と牛の糞(castanha, abelha, argamassa e fezes da vaca)がやってきました。蟹のすがた(o estado do caranguejo)を見て、

「蟹どん、蟹どん、どうしてそんな怪我をしたの」と聞きました。蟹は、

「猿が自分だけ柿を食べて、おれには青い柿をぶつけて行ってしまった」と言いました。

栗と蜂と臼と牛の糞は、

「そうか、おれたちもあの猿には、いつもひどい目にあっている(passando por apuros)。ちょうどいい、みんなで蟹どんのかたきをとってやろうじゃないか」と言って、かたき討ち(vingança)に出かけることにしました。

みんなで、猿の家に行くと、猿は家にはいませんでした。栗は、

「おれは、囲炉裏(lareira)の真ん中に隠れている。蜂どんは、井戸端(no canto do poço)へ行ってくれ」と言いました。すると、牛の糞が、

「おれは、どうすればいい」と、聞きました。栗は、

「牛の糞どんは、門口(entrada)へ行って、猿が通りそうな所にいてくれ。それから、臼どんは、屋根に上がって待っていてくれ」と言いました。

そうして、栗は囲炉裏の灰(carvão)の中に、蜂は井戸端に、牛の糞は門口に、臼は屋根に隠れました。猿がほいほいほいほいと言いながら、帰ってきました。そして、

「おお、寒かった。おお、寒かった」と言いながら、囲炉裏に火をおこしました(botou fogo)。やがて、囲炉裏の火がおきて、待ちかまえていた栗がバカーン(*onomatopeia de quando explode ou estoura)と音をたてて爆ぜました(explodiu)。猿は、

「あっちい(Que quente)、あっちい」と叫んで(gritou)井戸端へ飛んで行きました。猿が水をかけようとする、蜂は待ってましたとばかり長い針でちくん(*onomatopeia de quando espeta algo)と指しました。猿は、

「いたい。いたい。いたい」と言って、門口へ飛んで行って、ひょーい(*onomatopeia de quando

pula como se estivesse voando)と門口を出ようとしてしました。そこには、牛の糞が^{すわ}座っていたので、すってん(*onomatopeia de quando escorrega)とすべって^{ころ}転んでしまいました。そこへ、屋根の上から臼が、どしん(*onomatopeia de quando cai algo duro ou pesado)と猿の上に^お落ちました。

蜂や栗もよってきました(foi se aproximando)。臼が猿を押さえこんで、「どうだい。いたい目がわかったか。いつも悪さばかりするからだぞ」と言いました。猿は、「もうこれからは、悪いことは^{ぜったい}絶対しません。^{ゆる}許してください。」と、^{なみだ}涙をぼろぼろ(*onomatopeia de quando as lágrimas caem)こぼしたということです。

^{がっせん}
*合戦

Batalha.

*はさみ切る

Traduzindo fica “cortar tesoura”, mas o seu significado é “cortar **com** tesoura”.

*おれ

Antigamente existiam mulheres que diziam “ore” com significado de “eu”, mas atualmente são apenas homens que usam.

ダイダラボッチ

さいはなしかんせい び

再話完成日 2007・11・19

しゅってん しずおかけんでんせつむかしばなししゅう じょう しずおかけんじょ し し がっこう けんきゅうかいへん
出典 静岡県伝説昔話集 上 静岡県女子師範学校郷土研究会編

むかし、ダイダラボッチという、^{とほう}途方もない^{おおおとこ}大男がいました。

あるとき、ダイダラボッチは、^{おうみ}近江の土を^{するが}駿河に^{はこ}運んで行きました。大きなモッコを作り、
山ほどの土を入れて、^{ぼう}天びん棒で^{かた}肩にかついで近江を出ると、東へ向かって運んでいきました。
^{とちゅう}途中、^{いなさぐん}引佐郡の^{いめ}伊目というところで、^く天びん棒が^こ肩に^{かたが}喰い込んだので^{かたが}肩替えをしました。その
^{ひょうし}拍子にモッコの目から土がこぼれ落ちて小さな山ができました。それが^{こんぽんやま}根本山だと言うこと
です。

ダイダラボッチは、^{なか}お腹がすいたので、^{はまなこ}浜名湖のほとりの^{うづやま}宇津山に^{こし}腰をおろし、^{べんとう}弁当を食べ
始めました。すると、ガチッと石が齒にあたりました。ダイダラボッチは、

「なんだ。こんなもの」と言っ^{こいし}て、小石を目の前の^{みずうみ}湖に向^{ほう}かって放り^お投げました。小石が^お落ち
^{ところ}た所に、たちまち、島ができました。それが、ツブテ島とされています。

また、あるときダイダラボッチは、^{せんとう}千頭のあたりに^{ふじさん}富士山のような高い山をこしらえたいも
のだと思い、モッコに^{こやま}小山くらいずつ土を入れてかつぎ、千頭の^{きょうへい}郷平まで^{みんか}来ました。民家の近
くまで来ると、女の人が歌を歌いながら仕事をはじめたのが見えました。ダイダラボッチはも
う夜が明けたのかとたいへん^{おどろ}驚き、土を入れたモッコをそのままに^にして逃げて行きました。そ
のモッコの土というのが郷平の村の中に^{おか}丘とな^おって二つ残っています。また、あるとき、ダイ
ダラボッチは^{のど}喉が^{かわ}渴いたので、^{おおいがわ}大井川を^ほまたいで、川の水を^{えんしゅう}飲み干してしまいました。遠州の
山と駿河の山の上には、^{あしあと}大井川を^{くぼち}またいだ時の足跡が^{なづ}窪地にな^{なづ}って残っています。どちらも足
窪と名付けられています。

おしまい

おとんじょ池

再話完成日 2007. 11. 19

出典 大井川町 杉本みゑ 話

大井川流域の初倉村谷口の七曲がり坂を下りると、おとんじょ池と呼ばれる池がありました。

むかし、おとんじょ池には大きななまずがいて、この池の主だといわれていました。

あるとき、ひとりのじいさんが、だれも釣ったことのないその大きななまずを釣ってやろう
と思い、おとんじょ池へ出かけました。いくらまってもなまずは釣れません。帰ろうとしたと
き、おそろしく強い力でつり糸が引っぱられました。やっとのことで、釣り上げると、見たこ
ともない大きななまずでした。じいさんは、喜んで大きななまずを、しょいかごに入れました。
あたりは、すっかり暗くなっていました。じいさんは、家に帰ろうと、七曲がり坂をのぼって
いきました。やっと、七曲がり坂を登りきったとき、どこからか

「おとんじょー、おとんじょー」と声がしました。じいさんが、立ち止まって、あたりを見る
と、また、

「おとんじょー、おとんじょー」と声がしました。すると、今までしょいかごの中でぐったり
していたなまずが、ガバッと飛び上がり、しょいかごから飛び出して、七曲がり坂をはって
いき、やみの中にきえました。

しばらくして、おとんじょ池のあたりで、「どぼん」と音がしました。じいさんは、腰をぬ
かしてしまい、やっとなのおもいで家までたどりつきました。

それからというもの、おとんじょ池でつりをする人はいませんでした。

狐の恩返し

(狐の恩報じ 静岡県駿東郡)

再話完成日 2007. 11. 19

出典 日本昔話通観 岐阜・静岡・愛知

むかし、あるところに「骨なおし」のお医者さんがいました。あるとき、お医者さんは、足をくじいてこまっているきつねを、治してやりました。きつねは、たいそう喜んで、「お礼は、かならずします」といって帰っていきました。お医者さんは、きつねのことだからとあてにもしませんでした。

何日かすると、そのきつねがやってきて、お医者さんに、「今晚、このあいだのお礼にごちそうをしますから、ぜひわたしと一緒に来てください」といいました。お医者さんが、きつねについていくと、山のなかのりっぱなざしきに案内されました。お医者さんは、ざしきで、きつねが出してくれるごちそうをたくさん食べましたが、きつねがかなりりっぱなざしきをもっているはずがないと思いました。そこで、またあとで来てみようと思い、柱に紙をベタベタとはりつけて帰りました。

そのころ、ある家で、嫁入りがありました。その家では、ごちそうのぜんが四人分ほどたりなくなってしまう、家のものが、おおさわぎをしました。手伝いにきた人に聞いてみると、「たしかにごちそうのぜんは、祝言のざしきに運んだ」といいました。

あとになって、お医者さんがざしきのあったところに来てみると、柱にはった紙は、みんな松の木にはってありました。「骨なおし」のお医者さんが、きつねにごちそうになったのは、祝言のごちそうぜんだったそうです。

おしまい。

狐狸にだまされる話一髪そり狐

再話 2008. 5. 6

出典 日本昔話通観 「岐阜・静岡・愛知」

むかし、追分の乳母が池のそばに、人の髪の毛をそるのが好きな狐がいました。その狐を見に行った人はだれもかれも髪の毛をそられて、坊主頭になって帰ってきました。

村の人たちのはなしを聞いた庄屋は、

「そんな馬鹿なことがあるものか。人が狐に頭をそられるなんて」と、池のそばへ狐を見に行きました。すると、狐は田んぼのあおんどろをすくっては頭にのせていました。庄屋がみていると、狐は、あっというまにきれいなお嫁さんになりました。ところが、きれいなお嫁さんには、しっぽがありました。庄屋は狐に、

「よくばけたもんだな。だが、うしろにしっぽがでているぞ」といったので、狐はびっくりしてどこかへにげて行ってしまいました。

庄屋が家へ帰ろうと、街道のほうをひょっと見ると殿さまの行列が近づいてきました。庄屋は（どこの殿さまだろう）と思いながら、木の根元にすわって頭を下げていました。

そのとき、行列から、鷹がとつぜん飛び立ちました。行列の人たちは、殿さまの鷹がにげたので、あやしいものが、どこかにかくれているにちがいないとさわぎだしました。木の根もとの庄屋は、家来に見つけられると、

「くせもの」ととりおさえられてしまいました。殿さまは庄屋を

「殺せ」と命じました。すると、どこからか和尚が出てきて、

「殺すのはかわいそうだ。私にください。弟子にしますから」といいました。殿さまは、

「和尚よ。弟子にするなら、今すぐこの場で、くせものの頭をそれ」と命じたので、庄屋もとうとう髪の毛をそられてしまいました。髪の毛をそられた庄屋があたりを見ると、殿様も和尚もみな消えていました。

殿さま行列も和尚も、やはり髪そり狐のしわざであったということです。おしまい。

ちからくらべ

(原題 ^{さいさんじ}西山寺の仁王 静岡県榛原郡相良町)

再話 2008. 5. 12

出典 日本昔話通観 岐阜・静岡・愛知

むかし、相良の西山寺に仁王という男がいました。仁王は、この世の中で、自分より力の強いものはいないといばっていました。仁王があまりにもいばりちらすので、村のひとたちは、仁王に、

「中国には、ドウモコウモというたいそう力の強い人がいる」とつげました。仁王は、それを聞いて（この世のなかに自分より力の強いものがあるとはけしからん）と、烈火のごとくおこりました。そして、力くらべをして負かしてやろうと、さっそく海をこえて、中国へわたりました。

仁王がドウモコウモの家をたずねると、ドウモコウモはるすで、女の人が、ひとかかえもある大きなひばちを軽々とさげてきて、おいていきました。仁王が、ひばちを軽く持ち上げようとしたが、ひばちは、びくとも動きません。力をこめて動かそうとしたが、それでも動きません。仁王は女でさえ、こんな重いものを軽々とさげるのだから、ドウモコウモという人は、どんなに力があることかと恐ろしくなりました。そして、家の人に気づかれないように、そっと裏から逃げ出し、後ろも見ずに、いちもくさんに海をわたって西山寺に帰りました。仁王は、今にもドウモコウモが追ってこないかと心配になり、観音さまに助けを求めました。すると観音さまは、

「それならば、池のそばにあるさるすべりの木に登って、池の方へ伸びている枝につかまっていなさい」と教えてくれました。仁王は、いわれたとおりのさるすべりの木に登りました。

いっぼう、ドウモコウモは、家へ帰ってくると、日本から仁王というものが力くらべをしたいといってきたときいて、（なまいきなやつめ）とおこりました。そして、仁王をさがしまし

たが、影も形もみえません。外に出てあたりをみまわすと、はるかかなたに、海をこえて逃げていく仁王が見えました。ドウモコウモは、逃がしてなるものかとおもい、船に乗って、追いかけていくうちに、とうとう西山寺まできてしまいました。見ると、大きな池のなかで、仁王がにこにこ笑っているのが見えました。ドウモコウモはしめたと思い、池に飛び込みました。そのとき、観音さまが池の上からふたをしてしまいました。ドウモコウモは、（しまった。はかられた）と思いましたが、

「どうもこうもならぬ」といって、沈んでしまいました。

今では、仁王はさくの中に入れられて、足をふんばって、西山寺の門に立っています。そして、仁王が登ったというさるすべりの木は、今もなお花を咲かせています。

さいさんじ

西山寺の仁王

(原題 西山寺の仁王 静岡県榛原郡相良町)

再話 2008. 10 / 20

語り 西山寺 鈴木 きく

相良の西山寺には、むかし桜の木がたくさん植わっていました。その木には、猿がむれをなして遊んでいました。その様子は、

「西山寺の桜の木に猿が三万三千三百三十三匹止まった」という早口言葉として残っているほどです。

この西山寺に、仁王というたいそう力もちの男がいました。仁王は、自分ほど力の強いものはいないと、いばりちらしていました。それで村の人たちも猿もみんな仁王が好きではありませんでした。あまりにも仁王が力をじまんするので、村の人たちは、仁王に、

「中国へ行けば、ドウモコウモという、仁王さんよりもっと強い力持ちがいるそうだよ」とはなしました。仁王は、

「おれよりも力もちがいるなんて、けしからん」と、たいそうはらをたてました。仁王は、自分とどちらが強い力くらべをしたいと、西山寺のお薬師さんに、

「中国へ行かせてください」とお願いをしました。ところが、お薬師さんはなかなかお許しになりませんでした。仁王がなんどもなんどもお願いをすると、やっとお許しになりました。仁王が中国へでかける時に、お薬師さんが、

「これは、めったやたらにあけてはいかん。困ったときにあけなさい」と言って、小さな白い紙包みをくれました。仁王は紙包みをふところに入れて、出かけました。中国のどうもこうもの家は、すぐにわかりました。仁王が、

「日本からきた仁王だ。ドウモコウモと力くらべをしたい」と大きな声で言うと、家の中から

女房がでてきて、

「ドウモコウモはでかけています。じきもどるので待っていてください」といって仁王をへやに案内しました。そのへやの片すみには大きな火ばちがおいてありました。女房はひとさし指でひょいっと、火ばちをひっぱってきて、仁王の前におきました。そして、ドウモコウモを呼びに外へ出ていきました。

仁王は目の前の大きな火ばちを、女房が指一本でひっぱってきたので、自分も指でひっぱってみました。ところが火ばちはびくとも動きません。仁王は今度は立って両手で抱えて持ち上げようとしたのですが、それでもびくとも動きません。仁王は（女房ですら、あんなに軽々とひっぱってきたのだから、ドウモコウモはどんなに力もちかわからん）とおそろしくなり、が帰ってくる前ににげることにしました。仁王はどんどんどんどんにげました。

一方、ドウモコウモは、日本から仁王というものが力くらべにきたということを女房に聞いて、いそいで家にもどりました。けれども家の中にはだれもいないので、外へ出てみました。すると、はるかむこうににげていく仁王の姿がみえました。ドウモコウモは、
「まてー」とおいかけていきました。

仁王は、どんどんどんどんにげました。ついに道がなくなって、海に出ました。その時、お薬師さんからいただいた紙包みを思い出し、ふところからとりだしてあけてみると、くさりのついたいかりが入っていました。仁王はそのくさりをといて、遠くに浮いていた小舟めがけてばーんとなげました。いかりは、舟のふちにかかりました。仁王はくさをたぐりよせて、小舟にとびのって、相良の海へ帰りつきました。仁王はやっとなのおもいで西山寺のお薬師さんのところのにげかえり、助けを求めました。お薬師さんは、

「池のほとりにさるすべりの木がある。そのさるすべりの木の枝で一番池の方にでている枝につかまり池の中をのぞいて笑っていなさい」といいました。仁王は、さるすべりの木に登り、池の中をのぞいて笑っていました。ドウモコウモはおいかけてきて、池の中にいる仁王をみつけると

「ああ、こんなところにいたのか。つかまえたぞ」といってどぼーんと池の中にとびこみまし

た。すかさずお薬師さんが、池いっぱいのおたけをして、どうもこうもをふうじこめてしまいました。

これが、「どうもこうもならぬ」ということばのはじまりです。

浜松昔ばなし大学で昔ばなしの基本と、昔話は特に語り口が大切であることを教わりました。本の選書において、自らの周辺の子どもたちに良いものを見せてあげられるよう昔ばなし絵本を見る目も養ってまいりました。その後再話コースで実際に、『昔話通巻』等の中から元話を選び、再話を行ってきました。方言で語られている昔話を、今私たちが使っている言葉で、昔話しのルールにはずれないように、一話、一話再話してきました。グループのメンバーが集まり再話したものを再話コースの受講者の皆さんの手厳しいご意見をうがいながら、小澤先生のご指導の元に作り上げた再話です。

過去から未来への接続点でのこれらの再話が次代へのささやかな地域での発信源になることを願ってまとめました。ご覧いただけたら幸いです。